

# ありがとう かこさとしさん

未来のだるまちゃんへ  
かこさとし著  
文春文庫 2016

先日、慢性腎不全のため、92歳でお亡くなりになった絵本作家のかこさとしさん。亡くなる数ヶ月前に『だるまちゃん』シリーズの新作が出版されたばかりで、亡くなる直前まで意欲的に制作活動をされていました。『だるまちゃん』シリーズや『からすのパンやさん』はあまりにも有名で、今も昔もみんなから愛されています。先日、TVのドキュメンタリー番組でかこさとしさんの特集をやっていました。追悼の番組ではなく、あくまでかこさとしさんの仕事風景の取材と記されてあったのが印象的でした。亡くなる3ヶ月前のかこさとしさんは、たしかにとても弱ってらっしゃりしんどそうではありましたが、製作意欲はTV画面のこちら側まで伝わってくるほどでした。かこさん自身も、「描きたいことは頭の中にかくさんあるのに、からだは動かないのだ」と悔しく語っている場面では思わず胸がしめつけられてしまいました。わたしたちにいろんなことを教えてくれたかこさとしさん、今月はそんなかこさとしさんの『未来のだるまちゃんへ』という本を紹介します。

TVのドキュメンタリー番組の中でもかこさんがおっしゃっていましたが、かこさんにあって子どもたちは、自分の先生なのだそうです。（番組のなかでは子どものことを尊敬の意味をこめて“子どもさん”とよんでいました。）かこさんは戦争を経験し、そして敗戦（かこさんにとって終戦ではなく、敗戦なのだそうです。）しました。それから掌を返したような周りの大人たちの対応を見て、かこさんは愕然とします。そして自身を恥じ、自分はもう死に残りなのだと感じます。そんな自分に何ができるのか、そう考えたときに、思い浮かんだのは、大人たちではなく、これからの未来を担う子どもたちのことでした。かこさんは子ども独自の感性をととても大事に思っています。野放図で、自由で、とりとめがない。大人はいつのまにかその感性を忘れてしまっていますが、この子ども独自の歓声がとても肝心でわたしたちが見習うべきなのだ。たしかに、年をとるとどうしてもいろいろ考えてしまって、さきほどあげた子供らしさって気づくとどこかへいつてしまっているものです。いくら子供っぽくしようと思っても無理です。少し切ないですね...。（これは絵本作家荒井良二さんも言っていたなあ。）

かこさんは戦後まもなく、川崎市のセツルメント（いまでいう市民ボランティア）のお手伝いをするようになります。そこには、やんちゃで鼻タレな悪がきがいっぱいでした。絵を書く事が好きだったかこさんはそこで、紙芝居を作ったり、絵描き遊びをしたり、子どもたちと触れ合うなかで、子どもたちが持っている感情や考えに触れることになります。そして、それこそがかこさんの絵本作家の原点になりました。あの大人気シリーズ『だるまちゃん』のだるまちゃんのモデルも子どもなのだとか。

この『未来のだるまちゃんへ』を読んでいると、かこさんが作り出す絵本の数々は、かこさんの人生や思い、そしてかこさんの子どもたちへの愛がぎゅうとつまっているのだなあと感じます。そしてそれこそが、長年愛されている理由なんだなあと感じます。

もっとだるまちゃんシリーズ詠みたかったなあ（亡くなる少し前に、製作途中だった未完のだるまちゃんとうらしまちゃんも詠みたかったなあ）、もっといろんなことを絵本を通して教えてほしかったなあとさみしい気持ちでいっぱいですが、どうか天国で安らかに眠って欲しいなと思います。ご冥福をお祈りいたします。図書館では、いま追悼特集としてかこさとしさんの本を飾っています。よかったらそちらもどうぞ。